

っている。われわれは宗教社会学を扱った他の研究でこの問題をとり上げたことがあるが、本書にはこの分析の発展に役立つような部分はどこにもない。

(56) この主張をマルクスのことばに置きかえるとすれば、下部構造と上部構造との間には弁証法的な関係が存在する、とさえばよいであろう——これはごく最近に至るまでのマルクス主義の主流において広く忘れられてきたマルクスの洞察である。社会的に拘束されない知識の可能性の問題は、いうまでもなく、シェラーやマンハイムによって定義されたかぎりでの知識社会学にとって、中心的な課題となっていた。われわれの場合には、われわれの一般的な理論的接近法に固有の理由からして、こうした可能性の問題には、そのような中心的位置を与えるつもりはない。理論的な知識社会学にとって重要な問題は、知識とその社会的基礎との間の弁証法である。存在に拘束されないインテリゲンチヤ〈unattached intelligentsia〉に関してマンハイムが提起したような問題は、具体的な歴史的、経験的現象に関する知識社会学の応用に関する問題である。こうした現象に関する提言は、われわれがここでとり扱っているものよりも、はるかに理論的・一般性のレヴェルの低いところで行なわれねばならないであろう。これに対し、社会科学の知識の自律性に関する問題は、社会科学の方法論の文脈でとり扱われねばならない問題である。この領域については、われわれは序論で述べた理論的理由から、知識社会学の範囲に関するわれわれの定義からは除外してきている。

(57) これはオグバーン (Ogburn) 以来のアメリカ社会学で通常〈文化的遅滞〉(cultural lag) の名で呼ばれてきている現象である。われわれはこのことばが進化論的で、暗に評価的な意味合いを含むという理由から、その使用は控えてきている。

(58) 物象化 (Verdinglichung) という概念は重要なマルクスの概念であるが、とくにそれは「初期論文」(Früh-schriften) の人間学的考察において重要な意味をもっており、やがてそれは「資本論」(Das Kapital) において〈商品の物神的性格〉ということばによって発展させられていった。マルクス主義理論におけるこの概念の最近の展開として György Lukács, *Histoire et conscience de classe*, pp. 109ff.; Lucien Goldmann, *Recherches dialectiques* (Paris, Gallimard, 1959), pp. 64ff.; Joseph Gabel, *La fausse conscience* (Paris, Editions de Minuit, 1962) など

Formen der Entfremdung (Frankfurt, Fischer, 1964)等を参照。非教条的な知識社会学の内部でのこの概念の適用可能性についての広範な議論としては Peter L. Berger and Stanley Paltberg, "Reification and the Sociological Critique of Consciousness," *History and Theory* IV: 2, 198ff. (1965)を参照。マルクスの概念枠組においては、物象化の概念は疎外 (*Entfremdung*) という概念と密接に結びついている。最近の社会学文献においては、後者の概念はアノミー (anomie) から神経症に至るまでの諸現象と混同されてきており、用語上の原点復帰がほとんど不可能なところまでなされてしまっている。いずれにせよ、われわれは本書はそうした原義回復を試みるべき場所ではないと考えており、それゆえここでは疎外という概念の使用は控えることにした。

(59) デュルケーム社会学に対する最近のフランスの批評家たち——たとえばモノネロ (Jules Monnerot, *Les faits sociaux ne sont pas des choses*, 1946) キュヴィリエ (Armand Cuvielier, "Durkheim et Marx," *Cahiers internationaux de sociologie*, 1948) など——は、それを社会的現実についての物象化された見方だとして非難してきている。換言すれば、彼らはデュルケームのいう物性 (*chosette*) が事実上、物象化に他ならない、と主張してきているのである。しかしながら、デュルケーム解釈においてこのことについて何といおうとも、社会的な事実 (social facts are things) と主張し、しかもそのことによつて人間の所産 (human products) としての社会的事実の客観性ということだけを意図するのであれば、それは原理的には可能である。この問題を解くための鍵は客観化 (objectivation) と物象化 (reification) とを区別することにある。

(60) これについては「弁証法的理性批判」におけるサルトルの「実践的惰性態」(pratico-inert) という概念を参照せよ。

(61) こうした理由から、マルクスの物事を物象化して把らえる意識を虚偽の意識と名づけた。この概念はサルトルの「自己欺瞞」(*mauvaise foi*) とどういふと結びつけることができよう。

(62) 系統発生的なものであれ、個体発生的なものであれ、原型的物象化 (protoreification) を理解するための基礎としてはルシアン・レヴィー・ブリエールとジャン・ピアジェの研究を挙げるべきであろう。なおまた Claude Lévi-Strauss, *La pensée sauvage* (Paris, Plon, 1962) を参照。

- (63) 〈地上界〉と〈天上界〉との平行関係については Mircea Eliade, *Cosmos and History* (New York, Harper, 1959) を参照。同様の指摘は、ウェーゲリンの前掲書によっても、〈宇宙論的文明〉に関する議論のなかで行なわれている。
- (64) アイデンティティの物象化についてはサルトルの反ユダヤ主義の分析を参照せよ。
- (65) 物象化からの解放条件については Berger and Pullberg, *loc. cit.* を参照。
- (66) 〈正当化〉(legitimation) ということばはウェーバーから借りたものであるが、彼にあつてはこのことばはとくに彼の政治社会学の文脈で展開されている。われわれは、ここではそれをウェーバーのそれよりもずっと広い意味で使つてきている。
- (67) 〈説明〉としての正当化については〈派生体〉(derivations) についてのバレートの分析を参照せよ。
- (68) マルクスとバレートは、ともにわれわれが正当化関式 (legitimations) と呼んできたものが自律性をもちうることに気づいていた(マルクスにおける「ヘイデオロギー」とバレートにおける「派生体」)。
- (69) 〈象徴的世界〉(symbolic universe) というわれわれの概念は、デュルケームの〈宗教〉という概念に非常に近い。〈限定された意味の領域〉(finite provinces of meaning) とそれら相互間の関係についてのシュッツの分析と、〈全体化〉(totalization) というサルトルの概念とは、この点についてのわれわれの主張にとって極めて適切なものであつた。
- (70) 〈マージナルな状況||限界状況〉(Grenzsituation) ということばはカール・ヤスパスによつてつくられた。われわれはこのことばをヤスパスのそれとはまったく異なる意味で用いるつもりである。
- (71) ここでのわれわれの主張はデュルケームの「アノミー」の分析の影響を受けている。しかしながら、われわれは社会における「アノミック」な過程に対してよりも、「ノミック」な過程の方により大きな関心をもっている。
- (72) 口常的現実がもつ至高の地位については、シュッツがこれを分析している。とくに論文 "On Multiple Realities," *Collected Papers*, Vol. 1, pp. 207ff. を参照。
- (73) 主観的アイデンティティの不安定性については、すでに自我の発生についてのミードの分析のなかで示唆され

ている。この分析の発展については Anselm Strauss, *Mirrors and Masks* (New York, Free Press of Glencoe, 1959); Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life* (Garden City, N. Y., Doubleday-Anchor, 1959) 等を参照。

(74) ハイデッガーはすぐれた意味でのマージナルな状況としての死について、最近の哲学では最も精巧な分析を行なっている。〈根本的な不安〉(fundamental anxiety)というシュッツの概念もこれと同じ現象を指している。葬いの儀式がもつ社会的機能についてのマリノフスキーの分析もまた、この点で示唆的である。

(75) 実存哲学によって発展させられた〈不安〉(angst) についての一定の視座の応用は、アノミーについてのデュルケームの分析をより広い人間学的な準拠枠組のなかに置くことを可能にしてくれる。

(76) Lévi-Strauss, *op. cit.* を参照。

(77) 集団的記憶については Maurice Halbwachs, *Les cadres sociaux de la mémoire* (Paris, Presses Universitaires de France, 1952) を参照。なおまたアルバックスは記憶についてのその社会学理論を *La mémoire collective* (1950) および *La topographie légendaire des Évangiles en Terre Sainte* (1941) でも展開している。

(78) 〈先行者〉(Predecessors) 〉〈後続者〉(successors) という概念はシュッツから借りてきている。

(79) 社会の超越的性格という考えは、とくにデエルケームによって展開された。

(80) 〈投企〉(projection) という概念は、最初フョイエルバッハによって展開され、やがて非常に異なった方向においてではあるが、マルクス、ニーチェ、フロイト等々によって発展させられていった。

(81) ウェーバーの〈担い手〉という概念をもう一度参照せよ。

(82) 現代のアメリカ文化人類学における〈文化的接触〉(culture contact) の分析がこゝでは示唆的である。

(83) 現代のアメリカ文化人類学における〈文化的衝撃〉(culture shock) という概念を参照せよ。

(84) マルクスは実質的な権力と〈思想の面での成功〉との間の関係をかかなり詳細に展開した。これについては「下イッ・イデオロギー」のなかの有名な定式——「支配階級の思想はいつの時代においても支配的な思想である」(Friedrich Schlegel, Krüner edition, p. 373) ——を参照。

(85) パレートは社会学的用語による思想史の記述に非常に近いところまで来ており、このことが、彼の理論的な準備枠組には留保をつける人があったとしても、それとは無関係に、パレートを知識社会学にとつて無視できぬ人物に仕立て上げている。Briette Berger, *Vilfredo Pareto and the Sociology of Knowledge* (unpublished doctoral dissertation, New School for Social Research, 1964) を参照。

(86) これはオーギュスト・コントの〈三段階の法則〉(Law of the three stages) を想起させるかも知れない。もちろんわれわれはこの法則を受け容れるわけにはいかない。しかし、それでもなお、それは意識が歴史的に確認しうる諸段階を通じて発展する、ということを示唆している点において、有益である——もともと、この段階はコントのような形で考えることはできないのではあるが。この点についてのわれわれ自身の考えは、人間の思想の歴史性に對するヘーゲル・マルクスの接近法により近い。

(87) レヴィ・ブリュールとピアジェは、ともに神話が思想の発展における必然的な段階を形づくるものであることを示唆している。神話的・呪術的思考の生物学的基礎に関する示唆的な議論としては Arnold Gehlen, *Studien zur Anthropologie und Soziologie* (Neuwied / Rhein, Luchterhand, 1963), pp. 79ff. を参照。

(88) 神話についてのわれわれの考え方は、リ्यूーウ(Gerardus van der Leeuw)、『エリノーデ・ノルトマン(Rudolf Bultmann) 等々による研究の影響を受けている。

(89) 神話的知識における社会の秩序と宇宙の秩序との連続性については、再びエリアーデとツェーゲリンの研究を参照せよ。

(90) ここで〈知識人の社会学〉の問題に詳しく立ち入ることはまったくできないということは、われわれの理論的前提からして明らかであろう。この領域におけるマンハイムの重要な研究(これはとくに「イデオロギーとユートピア」と「文化社会学論集」Essays on the Sociology of Culture による) 以外には、Florian Znaniecki, *The Social Role of the Man of Knowledge* (New York, Columbia University Press, 1940); Raymond Aron, *L'opium des intellectuels* (Paris, *Situation der Intelligenz in der Gesellschaft* (Stuttgart, 1949)); Raymond Aron, *L'opium des intellectuels* (Paris, 1955); George B. de Husser (ed.), *The Intellectuals* (New York, Free Press of Glencoe, 1960) 等を参照。

(91) 制度的な〈惰性〉(ジーンメルのいう〈誠実〉)を強化する究極的な正当化機構については、デュルケームとパルトの両者を参照のこと。

(92) 制度についての機能主義的解釈の最大の弱点はまさしくこの点にある。というのも、こうした解釈には実際には存在しない実用性 (practicalities) を求めようとする傾向があるからである。

(93) パラモンクシャトリア間の抗争についてはウェーバーのインドについての宗教社会学の研究を参照せよ。

(94) 経験的に立証することの困難な主張の社会的承認については Leon Festinger, *A Theory of Cognitive Dissonance* (Evanston, Ill. Row, Peterson and Co., 1957) を参照のこと。

(95) 〈親和性〉 (Wahlverwandschaft) ということは、シェラーとウェーバーから借りてきている。

(96) 未開社会や古代社会における現実の独占的定義については、デュルケームとヴェーゲリンの両者を参照せよ。

(97) ラダイン (Paul Radin) の研究が示すところによると、懐疑的思考はそうした独占的状況の下においても可能であるという。

(98) 〈寄留民〉 (Gastvölker) ということはウェーバーから借りてきている。

(99) 政治的に保守的な勢力と宗教的独占者 (教会) との結びつきについては、僧侶政治についてのウェーバーの分析を参照せよ。

(100) 〈イデオロギー〉ということばはあまりにもさまざまな意味で使われすぎており、それをなんらかの厳密な方法で使うことは諦めざるを得ないような状況である。われわれはこのことばを狭く定義された意味で用いることに決定した。というのも、それはこうした形の解釈の方が有用であるし、新しいことばをつくり出すよりはましだからである。しかし、ここではマルクス主義と知識社会学の双方の歴史におけるこのことばの意味変化について論じている余裕はない。これについての便利な概要としては Kurt Leink (ed.), *Ideologie* を参照のこと。

(101) キリスト教のブルジョワ・イデオロギーに対する関係についてはマルクスとヴェブレン (Veblen) の双方を参照のこと。マルクスにおける宗教のとり扱い方に関する便利な概要は、選集 *Marx and Engels on Religion* (Moscow, Foreign Languages Publishing House, 1957) から得ることが出来る。

(102) Thomas Luckmann, *Das Problem der Religion in der modernen Gesellschaft* (Freiburg, Rombach, 1963) を参照。

(103) 知識人を「望まれない専門家」(unwanted expert)として扱われる立場は、知識人のマージナルなあり方に固執するマンハイムの考え方とさほど異なるものではない。われわれの考えからすれば、社会学的にみて有効であるように知識人を定義するには、このタイプの人びとを一般的な「博識家」(man of knowledge)からはつきりと区別することが重要である。

(104) 知識人のもつマージナルな性格については、他所者がもつ「客観性」についてのジンメル分析と、ユダヤ人が果たした知的役割についてのヴェブレンの分析を参照のこと。

(105) Peter L. Berger, "The Sociological Study of Sectarianism," *Social Research*, Winter 1954, 467ff. を参照。

(106) 革命的知識人についてのマンハイムの分析を参照のこと。革命的知識人のロシア的原型については E. Lampert, *Studies in Rebellion* (New York, Praeger, 1957) を参照。

(107) 革命的知識人から現状の擁護者への変身については、ロシア共産主義の展開のなかに実際、〈純粹〉な形で研究することができるといえる。この過程に対するマルクス主義の立場からの鋭い批判としては Leszek Kolakowski, *Der Mensch ohne Alternative* (Munich, 1961) を参照。

III 部 主観的現実としての社会

(1) 「他者の理解」というわれわれの概念は、ウェバーとシュッツの両者から借りてきている。

(2) 社会化とその二つの下位タイプについてのわれわれの定義は、社会学における最近の用法にほぼしたがっている。われわれは、ただわれわれの全体的な理論枠組に一致させるといふ目的のみ、このことばを採用してきている。

(3) ここでのわれわれの記述は、いうまでもなくミードの社会学論に大きく立脚している。

(4) 「媒介」の概念はサルトルから借りている。しかし、彼の場合にはそれにふさわしい社会学論が欠けている。

(5) 初期の学習過程における情緒的次元の問題については、とくにフロイトの児童心理学によって強調されたものである。もともと、これについては、彼の主張を裏づけるような行動主義的学習理論のさまざまな発見があるのではあるが、われわれは、ここでのわれわれの主張においては、いずれか一方の心理学派の理論的前提を受け容れるというつもりはない。

(6) 自我の反省的性情というわれわれの把らえ方は、クーリー (Cooley) とミードの両者から借りてきている。その基礎はウィリアム・ジェームズ (*Principles of Psychology*) の「社会的自我」(social self) の分析に見出すことができる。

(7) ここではこの問題を詳しく展開することはできそうにもないが、真に弁証法的な社会心理学の可能性を示唆するような主張は、すでに十分なされてきているものと思う。そうした心理学は社会学にとつと同様、哲学的人間学にとつても、等しく重要なものになるであろう。社会学に關してみれば、そうした社会心理学(基本的方向としてはミードのものになるであろうが、これに社会心理学的思考の他の流れからの重要な要素がつけ加わるであろう)は、理論的に支持することのできないフロイト的、ないしは行動主義的な心理学主義との結びつきを求め、努力を unnecessary なものにするであろう。

(8) 命名法については Claude Lévi-Strauss, *La pensée sauvage*, pp. 253ff. を参照。

(9) 「一般化された他者」(generalized other) という概念は、ここでは完全にミード的な意味で使われている。

(10) 社会の内にあると同時に社会の外にもあるものとしての人間の自己理解については、ジンメルを参照。プレスナーの「離心性」という概念は、ここでもまた適切である。

(11) 子どもの世界がもつ圧倒的な現実性についてはピアジェを参照のこと。

(12) ピアジェの「幼児のヘリアリズム」の系統発生学的な類似物については、レヴィン・リュールを参照せよ。

(13) Philippe Ariès, *Centuries of Childhood* (New York, Knopf, 1962) を参照。

(14) この点に關しては、思春期と結びついた「通過儀礼」についての文化人類学の分析を参照せよ。

(15) 「役割からの距離」(role distance) という概念はエリクソン (Erving Goffman) によつて、とくに *Asylum* (Garden

City, N. Y. Doubleday Anchor, 1961)のなかで展開されている。われわれの分析は、そうした距離は第二次的社会化において内在化された現実との関係でのみ可能であることを示している。もしそれが第一次的社会化で内在化された現実にも拡大されるならば、われわれはアメリカの精神医学が「心理療法」と名づけている領域に足を踏み入れていることになり、これはアイデンティティの不十分な形成を意味することになる。われわれの分析によって示されたもう一つの非常に興味ある問題は、社会的相互作用についての「ゴフマン的モデル」もそのなかで生きてくるような構造的限界に関するもの——つまり、客観化された現実の決定的要素が第二次的社会化で内在化されるように構成されている社会——である。なおまた、こうした考察はゴフマンのモデル（つけ加えておけば、このモデルは現代産業社会の重要な側面を分析するには極めて有用なものである）と「ドラマ的モデル」とをそのまま同一視することに警告を与えてくれるはずである。要するに、「印象の操作」(impression management)に縛りつけられている現代の組織人のドラマ以外にもドラマはあった、ということである。

(16) 職業社会学の研究、とくにヒューズ (Everett Hughes) によって展開されたそれは、この点に関して興味ある素材を提供してくれている。

(17) Talcott Parsons, *Essays in Sociological Theory, Pure and Applied* (Chicago, Free Press, 1949), pp. 233ff. を参照。

(18) ガース (Hans H. Gerth) とミルズ (C. Wright Mills) は *Character and Social Structure* (New York, Harcourt, Brace and Co., 1933) において、児童期以後の人生で現実の維持に携わる意味ある他者を示すものとして、「親密な他者」(intimate others) ということばを示唆している。われわれがこのことばの使用を好まないのは、それが最近ドイツ語圏の社会でさかんに用いられてきていることばで、しかもそれとはかなり異なった意味合いをもつ「親密圏」(Intimsphere) という用語と紛らわしいからである。

(19) この点については再びゴフマンと、それにリースマン (David Riesman) を参照。

(20) 「第一次集団」と「第二次集団」という概念はクリーリーから借りてきている。われわれはここでは最近のアメリカ社会学での用法にしたがっている。

(21) 〈言語装置〉(conversational apparatus) という概念については Peter L. Berger and Hansfried Kellner, "Marriage and the Construction of Reality," *Diogenes* 46 (1964), 1ff. を参照。フリードリヒ・テンプルック (前掲書) は、共通の現実を維持していく場合の意思疎通網のはたらきについて、いくぶん詳しく論じている。

(22) 文通については Georg Simmel, *Soziologie*, pp. 287ff. を参照。

(23) これとの関係では〈準拠集団〉(reference group) という概念が適切である。マートンがこれについて「社会学理論と社会構造」のなかで行なった分析を参照せよ。

(24) Peter L. Berger, *Invitation to Sociology* (Garden City, N. Y., Doubleday Anchor, 1963), pp. 54ff. を参照。

(25) 精神分析学の〈転移〉(transference) という概念がまさしくこの現象にあてはまる。しかし、このことばを用いる精神分析家たちが理解していないのは、いうまでもなく、この現象は社会化のやりなおし——これにはその結果として生じる、その任を帯びた意味ある他者への自己同一化がともなっている——のどの過程にも見出すことができる、ということであり、それゆえ、精神分析学的状況の下で生じる〈洞察〉の認知的妥当性に関しては、〈転移〉という現象からはなんらの結論も引き出せない、ということである。

(26) これはデュルケームが宗教のもつ必然的に社会的な性格について分析したときに触れた問題である。しかしながら、われわれは宗教の〈道徳的共同体〉を指示するのに彼が用いた〈教会〉ということばは、使わないでおきたい。というのも、それは宗教の制度化における歴史的に特殊な事例についてのみあてはまるものだからである。

(27) 中国共産党の〈洗脳〉の技術についての研究は、翻身の基本的形態を正確に描き出している。これについては、たとえば Edward Hunter, *Brainwashing in Red China* (New York, Vanguard Press, 1951) を参照。ユフマンは「収容所」のなかで、アメリカにおける集団心理療法との手続き上の類似性を指摘するようなことをやっている。

(28) 相互に矛盾した現実定義を回避することについては、再びフェスティンガーを参照のこと。

(29) Thomas Luckmann and Peter L. Berger, "Social Mobility and Personal Identity," *European Journal of Sociology*, V, 331ff. (1964) を参照。

(30) この点についてはリースマンの〈外部志向〉の概念とマートンの〈先を見越した社会化〉(anticipatory socializa-

tion) の概念が示唆的である。

(31) Arnold Rose (ed.), *Human Behavior and Social Processes* におけるフライドソン (Eliot Freidson) のリットマン (Theodor J. Litman) の「ロス (Julius A. Roth) 等々の医療社会学についての論文を参照。」

(32) われわれの主張は制度化の分析には巨視社会学的背景、つまり制度化がそのなかで生じる社会構造の理解が必要であることを示している。今日のアメリカ社会心理学は、そうした背景を大きく欠いているという事実によって、ひどく欠陥の多いものになっている。

(33) Gerth and Mills, *op. cit.* を参照。なおまたテンブルックの前掲書をも参照。彼は未開社会、伝統的社会、近代社会のその類型学において、パーソナリテイの構造的基礎に重要な地位を与えている。

(34) このことは、現代の科学的心理学のモデルをも含む大部分の心理学的モデルが、限られた社会・歴史的な応用可能性しかもち合わせていないという重要な指摘を含んでいる。さらにまた、それは、社会学の心理学は同時に歴史心理学でもあらねばならない、ということをも意味している。

(35) Erving Goffman, *Stigma* (Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall, 1963) を参照。なおまた A. Kardiner and L. Ovesey, *The Mark of Oppression* (New York, Norton, 1951) を参照。

(36) Donald W. Cory, *The Homosexual in America* (New York, Greenberg, 1951) を参照。

(37) われわれはここで分析の「ゴフマン的モデル」の応用可能性に対する社会・構造的条件の重要性について、再び強調しておきたい。

(38) シェルスキー (Helmut Schelsky) は現在の「諸世界の市場」(market of worlds) に対する心理学的同族語として「持続的反省」(Dauerreflexion) という示唆的なことばをくり上げた(「Ist die Dauerreflexion institutionalisierbar?», *Zeitschrift für evangelische Ethik*, 1957)。シェルスキーの主張の理論的背景にあるのは、現代社会における「主観化」(subjectivization) についてのゲレンの一般理論である。この問題はさらにルックマン(前掲書)によって現代宗教の社会学という形で展開されている。

(39) Luckmann and Berger, *loc. cit.* を参照。

(40) 〈集团的アイデンティティ〉について語ることは、それが誤った(そして物象化された)実体化を生み出す危険性があるだけに、推奨するわけにはいかない。そうした実体化の極端な例は一九二〇年代から一九三〇年代にかけてのドイツにおける〈ヘーゲル的〉社会学(たとえばシュパン Othmar Spann の研究など)である。こうした危険は大なり小なりデュルケーム学派やアメリカ文化人類学の〈文化とパーソナリティ〉学派のさまざまな研究のなかにも見出せる。

(41) ここで意味されているのは、いうまでもなくフロイトの〈現実原則〉に対する社会学的批判である。

(42) Peter L. Berger, "Towards a Sociological Understanding of Psychoanalysis," *Social Research*, Spring 1965, 26ff. を参照。

(43) *Ibid.* を参照。

(44) ここで論じられている自然と社会との間の弁証法は、決してエンゲルスや後のマルクス主義によって展開された〈自然の弁証法〉と等置されるべきではない。前者が強調しているのは、(一般に自然に対すると同様に)自己自身の身体に対する人間の関係それ自体も、すぐれて人間的な関係である、ということだ。これに対し、後者の場合はすぐれて人間的な現象を非人間的な自然に投射し、次いで人間を自然の力とか自然法則とかの対象にすぎないものとして扱えることによって、理論的に人間を非人間化する。

(45) こうした〈社会身体学〉(sociosomatics)の可能性については Georg Simmel, *op. cit.*, pp. 483ff. (〈感覚の社会学〉)についての論考) ; Marcel Mauss, *Sociologie et anthropologie* (Paris, Presses Universitaires de France, 1950), pp. 365ff. (〈身体の技術〉) ; Edward T. Hall, *The Silent Language* (Garden City, N. Y., Doubleday, 1955) 等を参照。性行動の社会学的分析は、おそらくそうした学問に最も豊かな経験的素材を提供してくれるであろう。

(46) これについては社会化に関するフロイトの考え方のなかで非常にうまく扱えられている。この点はマリノフスキー以来、フロイト理論の機能主義的応用において過小評価されてきたものである。

(47) ここではアンリ・ベルグソン(とくにその持統の理論)、モーリス・メルロー・ポンティ、アルフレッド・シュツ

ツ、ジャン・ピアジェ等々を参照。
(48) これについてはフロイトとともに、デュルケームとアレスナーの両者をも参照のこと。

新版訳者あとがき

本書は一九七七年に「日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法」という表題の下に翻訳・出版された Peter L. Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality—A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York, 1966 の新版である。今回、表題を「現実の社会的構成—知識社会学論考」と原著のそれに戻したのは、内容からみて原題に捨て難い魅力があること、それに読者からの指摘をいただいたことである。人々の共働の産物としてある社会的現実というニュアンスを伝えるためには、やはり原題に忠実であつた方がよいと考え、今回、それに復することにした。

改めて著者の略歴を記しておきたい。

まずピーター・L・バーガーは一九二九年にウィーンで生まれ、一九四六年にアメリカに移り住み、市民権を得て今日に至っている。ワグナー大学およびニュー・スクール・フォア・ソーシャル・リサーチで社会学を学び、以後、ジョージア大学、母校のニュー・スクール大学院、ラトガーズ大学などで教鞭をとってきた。一九六五—七〇年にかけて雑誌 *Social Research* の編集者をつとめ、その後 *Worldview* の編集にも手を貸した。主な著書としては本書以外に次のようなものがある。

The Precarious Vision—A Sociologist Looks at Social Fictions and Christian Faith. (1961)

The Noise of Solemn Assemblies. (1961)

Invitation to Sociology—A Humanistic Perspective. (1963) 邦訳「社会学への招待」水野節夫・村山研一訳、思索

社、一九七九年。

The Sacred Canopy—Elements of a Sociological Theory of Religion. (1967) 邦訳「聖なる天蓋」岡田稔訳、新曜社、一九七九年。

A Raimour of Angels—Modern Society and the Rediscovery of the Supernatural. (1969) 邦訳「天使のうわさ」荒井俊次訳、ヨルタン社、一九八二年。

Sociology—A Biographical Approach. (1972, with B. Berger) 邦訳「バーガー社会学」安江孝司他訳、学智研究社、一九七九年。

The Homeless Mind—Modernization and Consciousness. (1973, with B. Berger and H. Kellner) 邦訳「故郷喪失者たち」高山真知子他訳、新曜社、一九七七年。

Pyramids of Sacrifice—Political Ethics and Social Change. (1973) 邦訳「犠牲のピラミッド」加茂雄三他訳、紀伊国屋書店、一九七六年。

Facing up to Modernity—Excursions in Society, Politics and Religion. (1977)

The Heretical Imperative—Contemporary Possibilities of Religious Affirmation. (1980) 邦訳「異端の時代」岡田稔・金井新二訳、新曜社、一九八七年。

Sociology Reinterpreted—An Essay on Method and Vocation. (1982, with H. Kellner) 邦訳「社会学再考」森下伸也訳、新曜社、一九八七年。

The Capitalist Revolution—Fifty Perspectives about Prosperity, Equality and Liberty. (1986)

Redeeming Laughter—The Comic Dimension of Human Experience. (1997) 邦訳「癒しと笑いの笑い」森下伸也

訳、新曜社、一九九九年。

みられるように、守備範囲は非常に広く、社会学理論や宗教社会学はもとより、知識社会学やヘューモアの社会

学、それにアイデンティティ論や第三世界論に至るまでその論考は及んでいるが、本書との関係で注目を集めたものとして Stanley Paulberg との共筆になる次のものであることを記しておきたい。『Reification and the Sociological Critique of Consciousness』, *History and Theory*, Vol. IV, 1965 (拙訳「物象化と意識の社会学的批判」『現象学研究』二号、一九七四年)。この論文は本書への橋渡しという意味でも、一説する価値のあるものである。

もう一人の著者であるトーマス・ルックマンは一九二七年に旧ユーゴスラヴィアのイェセニツツェで生まれ、インスブルック、ウィーン、それにバーガーと同じニュー・スクールなどで哲学および社会学を学んだ。一九六〇―六五年にかけてニュー・スクールで教壇に立ち、その後ドイツのフランクフルト大学に迎えられ、一九七〇年以後はコンスタンツ大学で教鞭をとった。専門領域は理論社会学、宗教社会学、職業社会学、それに言語社会学などである。著書としては次のようなものがある。

Zum Problem der Religion in der modernen Gesellschaft — Institution, Personen und Weltanschauung. (1963)
邦訳「見えない宗教」赤池憲昭・ヤン・スィングドー訳、ヨルダン社、一九七六年。

The Structures of the Life-World. (1973, with A. Schutz)

The Sociology of Language. (1975)

Lebenswelt und Gesellschaft. (1980)

Theorie des sozialen Handelns. (1992)

Wissen und Gesellschaft. (2002)

いわゆる〈現象学的社会学〉を代表する二人の人物によって著された本書の内容を、ここで詳しく〈解説〉することは控えておきたい。下手な解説をするよりも、本書を読んでもらった方がわかりいと思われるからである。ただ本書の副題につけられた〈知識社会学論〉ということばについてだけ、一言つけ加えておきたい。

この副題をみるかぎりにおいては、本書は社会学のなかでの一特殊分野をとり扱ったものとしてのみ理解されるおそれがある。知識社会学というのは、従来は一種の観念の整理学のようなものとして考えられてきた。つまり、それはさまざまな観念（思想やイデオロギー）をその内在的な論理や価値にしたがつて研究するのではなく、それらを生み出したと考えられるさまざまな理論的要因（たとえば社会・経済的要因）にそれらを帰属化させる、いわゆる観念の〈外在的観察法〉（*Außenbetrachtungsweise*）の適用例として考えられてきた。しかも、そのさい対象とされる観念は、おおむね思想家や理論家によって形成され、体系化されたところの思想やイデオロギーであつた。知識社会学はこうした思想やイデオロギーの社会的要因による〈存在拘束性〉（*Seinsgebundenheit*）を研究する学問として一般に理解されてきたのである。

ところが、本書の著者たちが企図する知識社会学はこうした意味でのそれではない。著者たちが序論のなかで強調しているように、彼らがとり上げる〈知識〉というのは思想家や理論家によって形成され、体系化された諸観念ではなく、ごく平凡な日常生活を営みつつある普通の人間がその社会についてもっている常識的な〈知識〉なのである。しかも彼らがこの種の常識的知識をテーマとしてとり上げるには、それなりに正当な理由がある。というのも——そしてまたここに、本書が現象学的アプローチを探ることになった根拠の一つがあるのだが——理論化され、体系化された思想や観念というものは、一般に〈知識〉として社会のなかで通用しているものなかもその一部を占めるにすぎず、しかもその重要性においても、必ずしも常に日常的知識よりも上位にあるとは限らないからである。あるいは、著者たちのことばをかりれば、理論化されたさまざまな観念体系が成立しうるのもそれらが理論以前の〈知識〉がもつ〈有意性構造〉（*relevance structure*）や〈信憑性構造〉（*plausibility structure*）に支えられているからであつて、観念体系に究極的な妥当性を付与するのは、理論以前の常識的な〈知識〉であるからである。現象学というところの科学以前の〈生活世界〉とそれを自明のものとして生きつつある〈自然的態度〉を構成するものとしての〈知識〉こそ、すぐれた意味で知識社会学の主題となるべきなのであつて、従来、あまりにもこのことが無視されつづけ

てきた、と著者たちは主張するわけである。

しかし、著者たちは、常識的な〈知識〉による社会的現実の構成という、主観（体）的側面のみを強調するわけではない。現象学的アプローチをとる社会学がとすれば陥りやすいこの一面性を、著者たちはいわゆる〈社会化〉論を導入することによって慎重に避けている。日常的な〈知識〉は社会的現実を構成するだけでなく、逆に社会的現実によって構成されるものという、弁証法的な視点を導入することによって、著者たちは客観的な現実が主観的な現実へと内在化されてゆくプロセスをも重視するわけである。こうして著者たちは、社会学の伝統における〈社会唯名論〉か社会実在論か、あるいは〈ウェーバーかデュルケムか〉という方法論上の二者択一を克服する途をめぐすことになる。

このように、副題に〈知識社会学論〉と書かれていても、本書は決して狭い意味での〈知識社会学論〉として理解されるべきではない。著者たちがいうように、ここでは知識社会学は従来のような社会学における一特殊分野、ないしは社会学におけるマージナルな分野として扱われてきたのではなく、個人と社会とのあり方についての一つの新しいアプローチの仕方として考えられているのである。社会学と哲学の成果を結びつけることによって、社会学がその研究対象とする社会なるものの最も基本的でア・プリオリな構成のされ方を明らかにしようとするものである。かぎりにおいて、本書は一種のメタ社会学を企図するものとして理解してよいのかも知れない。

本書は一九六六年に出版されて以来、大きな反響を呼んできた。いささか大げさで、宣伝臭くなるかも知れないが、本書は一九六〇年代のアメリカ社会学が生み出した最大の成果の一つであり、いまではすでに一種の〈準古典〉にさえなったかの感がある。ドイツ語、イタリア語、デンマーク語、スペイン語等にもすでに翻訳されて多くの読者を獲得してきていることも、このことを裏書きしているように思われる。もちろんその評価はさまざまである。〈科学性〉という規程を重視する人々から見れば、科学を憑依論や神話体系と機械的に同等視しかねないような本書の主張は受け容れがたいであろうし、マルクス主義の観点からすれば、たとえば物象化の問題を人間学的レヴェルにまで一般化

してしまふようなやり方には問題が残るかもしれない。一方また、従来の社会学の立場からすれば、本書は〈現象学〉ということばにとすればつきまとう反科学的な印象を和らげてくれる一方で、はたしてこの種の理論が、それが主張するような、従来の社会学理論の〈欠陥〉を補いうるものかどうか、という問題が起こつてこよう。他方、ラディカルな〈現実構成主義者〉からみれば、本書はあまりにもオーソドックスな社会学に妥協しすぎており、〈過社会化された人間〉像をそれとなくもち込むことによつて、現象学的アプローチがもつていた従来の社会学に対する批判的視点を曇らせてしまつてゐる、という批判も出てこよう。

こうしたさまざまな評価が生まれてくるのも、その原因の一つは、本書がさまざまな立場の——たとえばマルクス主義と現象学との、社会学と哲学との、ウェーバーとデュルケームとの、そしてまたパーソンズとG・H・ミードとの——概念折衷法 (conceptual eclecticism) を採つてゐるからであり、評者の理論的アイデンティティの在処が異なれば、その評価も当然のことながら異なつてこざるを得ないからである。それゆゑ、これらの評価のいづれが正しいのか即断することは避けて、読者一人ひとりの判断に委ねておくことにしたい。

ここで訳語の修正について若干つけ加えておきたい。みられるように、本書にはヘーゲルやマルクスに由来するいくつかのことばが、基本用語として用いられてゐる。このうち、externalization は Entäußerung の英訳と考へて〈外化〉と訳しておいた(わが国ではこの語は〈対象化〉Vergegenständlichung と互換可能なような用い方をされてゐる)。次に Objectivation であるが、これは原注で Versachlichung の訳語である旨が記されてゐる。日本ではこの語を〈物象化〉と訳すことも多いようであるが、本書でのそれは人間の外化活動によつて何らかの客観的な現実なり事象なりがつくり出されること、そして objectivations は、こゝしてつくり出された現実や事象のことを意味してゐる。旧訳では objectivation がしばしば externalization と区別しがたいような形で用いられてゐたため、objectivation に〈対象化〉、objectivations に〈対象化された事物〉、〈対象化過程の産物〉等々という訳語を当ててゐたが、読者か